

Title	大学アーカイブズの展示活動の現状に関する一考察： 同志社大学同志社社史資料センターを事例として
Sub Title	A study about current status of exhibition activities of university archives : a case study in Doshisha Archives Center, Doshisha University
Author	小枝, 弘和(Koeda, Hirokazu)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2022
Jtitle	近代日本研究 (Journal of modern Japanese studies). Vol.38, (2021. ) ,p.35- 74
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：学校史の展示とその展開
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20210000-0035">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20210000-0035</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 大学アーカイヴズの展示活動の現状に関する一考察

——同志社大学同志社社史資料センターを事例として——

小枝 弘 和

### 一 はじめに

現時点において、資料関連業務のひとつとして、博物館もしくは博物館に類似した施設を備え、スクールアイデンティティの醸成などを目的とした啓蒙活動のひとつとして、展示活動を実施している大学アーカイヴズは数多く存在する。その展示活動は、いわゆる博物館活動に準じるものであり、スクールアイデンティティの形成や醸成を主眼とする活動だけでなく、企画展のようなテーマに基づいて学術的な成果を公表する活動を実施している大学アーカイヴズも多い。同志社大学同志社社史資料センター（以下、センターと略す。）の展示

活動もこの種の一時例にあたる。

現代では資料関連業務の一環として展示活動は一般的な業務になりつつある。しかし、大学アーカイヴズの多くが学校史の編纂事業を設立の背景として、展示活動は副次的な業務になる。センターも年史編纂を背景に設置された部署であるが、その展示活動は現在では資料関連業務の中でも主要業務に変化した。そこで、本稿では同志社を事例としてこの変化の過程とその過程で生じた諸問題を詳述し、センターの展示活動のルーツと現状を大学アーカイヴズの展示活動史の一時例として提示する。ただし、同志社における展示活動の嚆矢はセンターではないため、前史にあたる同志社における明治中期以降の博物館構想及び展示活動とその意義を踏まえた上でセンターの展示活動に言及する。

## 二 二つの博物室

### (1) 神学校教員による宗教博物館構想

同志社史<sup>(2)</sup>における博物館活動の記録として現存する最古の記録は、一八九三年（明治二六）頃に発足した同志社神学校の宗教博物館（室）構想とその実践である。この構想と実践については元同志社社史資料室長の河野仁昭氏の先行研究<sup>(3)</sup>があるが、ここでは宗教博物館の要旨だけを原資料から取り上げて示す。

この宗教博物館構想は一八九三年六月、当時神学校の教員であった湯浅吉郎（一八五八—一九四三）、松山高吉（一八四七—一九三五）、M・L・ゴードン（一八四三—一九〇〇）らで結成した同志社宗教博物館創立委員の名前で印刷・配布された「同志社宗教博物館設立之趣旨」<sup>(4)</sup>（以下、「趣旨」と略す。）に明記されている。

湯浅らは事前に小崎弘道同志社社長ら社員会（現在の理事會に相当）に「宗教博物室設立しニ付願書」<sup>(5)</sup>を提出し、「趣旨」は社員会の許可を経て広く一般に公表された。

「趣旨」は「神学の研究に必要なもの二ツあり、一ツは宗教図書館にして一ツは宗教博物館」であることを前提として、「宗教博物館のかたはその必要を認めねばにや未だ不完全の者すら我国になし」とし、これが「神学教育に大いなる欠点なり」として、宗教博物館の設立を訴えている。その最たる理由を、「神学の研究には必ず宗教上の実事を知るをもて肝要とは為なり、その実事を知んには宗教博物館より善はなし」としている。別の表現として「活社会の道徳を維持しその元気を鼓舞したる活宗教の真相はたゞ實際の实物につきて始めて見ることを得べきのみ」ともある。すなわち、委員らが構想する宗教博物館は実世界に生きる宗教をその時に実在した文物を通じて学ぶことを目的とし、この目的自体が神学教育であるというロジックである。そして、収集対象となる資料分野として「第一仏教之部」「第二神道之部」「第三天主教之部」「第四雑宗之部」が挙げられ、学内だけでなく学外にも広く資料寄贈を訴えた。ここに挙げられた四分野にはプロテスタントは含まれていない。「趣旨」には、「我国には仏教神道天主教その他にも種々の宗教ありぬべし、それらの宗教に係る物どもは漏さで集めまほしく思うなり」とあり、あくまで日本土着あるいは伝来した、プロテスタントを除く宗教資料が収集・研究の対象である。その理由として、「外邦の学者も日本の宗教を研究せんとおもはゞ我宗教博物館に來りてその材料を得るにいたらん然ばたゞに我が同志社わが日本の為のみならず世界にまで此上なき便益を蒙ふらしむべし」とある。表向きは、日本に根付いた、プロテスタント以外の宗教を資料で概観することが可能な宗教博物館の設立構想である。しかし一方で、「趣旨」が伝道師及び牧師養成機関である神学校の教員らの言葉であることを考慮すれば、プロテスタントの宣教師や伝道師が赴任地の宗教事情を学び、伝

道効率を向上させることも目的とされていたことが行間より窺える。この意味では日本の関西地方の伝道拠点である同志社に右の趣旨で宗教博物館を設置することはアメリカン・ボード（同志社を支援した、アメリカの海外伝道会社）の伝道戦略上有益であることは間違いない。言い換えれば、宗教博物館構想は神学教育だけでなくボードの日本伝道戦略にも有益な効果を期待できた施設ということになる。

続けて「趣旨」には「今幸ひにも同志社神学館成れり、暫くその一室を借りて輯集の物品を陳列し之を宗教博物館と称えて宗教博物館の立たん日を竣つ」とある。ここにある同志社神学館とは、久良留久（クラーク）神学館、現在のクラーク記念館を指す。神学校は一八八九年（明治二二）に同志社英学校（中等教育レベル）の上位に位置する学校として開校したが、専用校舎は存在しなかった。神学校にとっては専用校舎ができたことが宗教博物館構想を立ち上げ実践する一つの転機であり、構想を実現するために神学館の一室を宗教博物館として利用し、実績作りを始めることになる。

この宗教博物館構想は、最初は宗教博物館として実際に神学館内で運営され始めたことが『同志社明治廿六年度報告』<sup>(7)</sup>に記事としてある。また、以降、ほぼ各年度の報告書に宗教博物館への寄付が一九〇八年（明治四一）まで報告された。<sup>(8)</sup>その後は、宗教博物館に関する報告及び資料は管見の限り存在しない。先行研究では一九一二年（明治四五）に同志社大学が開校した際に、教室の確保のために宗教博物館が整理されたと推定しているが、明確な理由は不明である。いずれにせよ、一九一二年頃には神学校の宗教博物館は役割を終えていたと考えられる。<sup>(9)</sup>

(2) 普通学校博物学教員による博物館運営

神学校の宗教博物館は短命でその役割を終えていくが、ほぼ同時にもう一つ博物館が誕生している。開設者は同志社普通学校（のちの旧制同志社中学校）教員の加藤延年（一八六六—一九四五）である。加藤の後年の随想を確認すると、加藤は一八九九年（明治三二）四月に同志社普通学校に赴任し、地理歴史及び博物学を担当することになり、時期は不明であるが、加藤の普通学校生徒時代の恩師 M・R・ゲインズ (Marshall Richard Gaines, 一八三九—一九二四) が残っていた鉱物標本、そして、同じく恩師の児玉信嘉が収集した動物標本を利用して授業をしていたことがわかる<sup>(10)</sup>。実際に加藤は恩師の残した標本に寄付や個人購入の標本を追加することで膨大な数の標本を収集した。のちにこの標本群は加藤コレクションと呼ばれ、現在も同志社内では知る人ぞ知る剝製及び博物学標本である（現在非公開）<sup>(11)</sup>。

加藤は恩師らが残した標本をもとに普通学校内に博物館を設けたが、設置時期と場所は不明である。ただし、加藤は普通学校に就任した一八九九年頃から既存の標本に新しい標本を加え、少なくとも一九一二年には神学館とは別に博物館が存在していた。卒業生らの団体・同志社校友会が発行していた『同志社時報』第八六号（明治四五年三月二五日発行）の雑録欄に、加藤の名前で「絵葉書、標本類の寄贈を望む」と題された記事があり、冒頭に次のようにある。「博物地理等の教授に標本の必要なるは言ふまでもなきことにして、標本の蒐集、整理、配列、保存及び利用は實に容易の業にあらず、我同志社には幸に博物館の設ありて其内に數百點の標本を蔵し、教授上の便宜まことに尠しとせず」<sup>(12)</sup>。

加藤は同記事にてこうした収蔵資料の教育的意義として「夫れ教師が生徒諸君に努力と興味とを惹起し、巧

に此二者を調和一致せしめ、以て教授の有効を期すべきは言ふまでもなきこと」と記している。加藤は実物標本のもたらず教育的効果を強調しているが、同じ趣旨の発言内容が同志社理事会内においてもしばしば散見される。例えば、一九〇二年（明治三五）三月二八日開催理事会の記録には、同志社普通学校専門部の在学期間変更に関する発言記録の中に、在学年数を減少したとしても「講義筆記ヲ主トセズ開發主義ニ從テ学生ヲシテ教科書參考書実験ヲ以テ咸々自習研究セシムル結果其切程ニ於テハ教ヲ劣ルコトナキヲ得ベシ」とある。同志社の教育主義が開発主義である以上、加藤が収集する自然史関係の博物館資料収集及び教育利用は同志社の教育方針に合致していたと言える。

加藤は在籍中に相当数の博物館資料を収集した。加藤が教員職に就任してから二三年後の一九三五年（昭和一〇）に発行された『我等の同志社』に、加藤自らが「同志社博物館の現状は獣類が二百に近く、鳥類が三百に近く、貝類は千種を超え、雑然として二大室に満ち、全然倉庫の觀を呈し、殆ど通路がない位である」と当時の状況を書き残している。<sup>(14)</sup>膨大な点数となった博物館資料は、この時は波里須理化学館（現在のハリス理化学館、国指定重要文化財で同志社ギャラリー設置）二階に収蔵されていたとされる。<sup>(15)</sup>ただし、加藤は一九三三年（昭和八）に同志社を退職しており、記事を発表した時には嘱託として博物館の管理に専念していた。<sup>(16)</sup>その後、加藤は少なくとも一九三九年（昭和一四）まで嘱託教員として博物館事務を担当していたことが当時の職員録からわかるが、その後の管理がどうなったかは判然としない。<sup>(17)</sup>加藤が集めた博物館資料は、一九四四年（昭和一九）の同志社工業専門学校開校を機に図書館（現在の啓明館）に一時移管され、戦後の一九五〇年（昭和二五）には、旧制中学校の後身のひとつである同志社高等学校がある岩倉キャンパスにあった醇化館（元武道場、一九二九年竣工、昭和天皇御大典後に下賜された建物）へと移された。<sup>(18)</sup>これが意味するところは、加藤は

あくまで旧制中学校の教員であり、加藤が収集した博物資料の管理責任は旧制中学校の後身となる学校が負っていたことである。そのため、旧制中学校の受け皿の一つとなった新制高等学校が存在し、かつ収蔵可能な建物があった岩倉キャンパスが博物資料の保管場所として選ばれたと推測される。加藤の博物資料は二〇一五年（平成二七）時点で総数約八、〇〇〇点と言われている<sup>(19)</sup>。しかし、醇化館は二〇一一年（平成二三）に解体され、博物資料は大学に移管されたため、この数字は大学移管時の資料点数を指していると考えられる。現在は大学企画課が管理している。

以上、同志社史における二つの博物室について概説した。双方の博物室が発案者の帰属する学校への教育的貢献を強く意識して構想・設置・運営されたものであった。そのため、学校史に直結するような施設ではなかった。

### 三 同志社における大学アーカイヴズの展示活動の嚆矢

#### （一）新島会館維持会による博物館構想

明治時代に構想された二つの博物室の運営は、実態を伴う教育活動であったが、双方の博物室ともに考案者及び発案者が同志社を離職した後はそれらを維持・発展させることは難しく、縮小・廃止せざるを得ない状況になっていった。また、両博物室がそれぞれ限られた学問分野や学校の利用に限定されたため、同志社内における認知度も低く、施設を運営するための求心力もマンパワーも維持が困難であったことが窺われる。ただし、ちょうど加藤が同志社を退職する頃から練られた新たな博物館構想があった。同志社の創立者新島襄の遺

品及び資料を中心にした博物館構想である。同志社男子部諸学校の卒業生で構成される団体・同志社校友会（以下、校友会と略す。）が打ち出した構想である。

校友会は、一八八五年（明治一八）に組織されたアルムニを前身とする団体であり、校友会の名称は一八九〇年（明治二三）から使用された。<sup>(21)</sup> 校友会はその設立以来、同志社を金銭的精神的に支える活動を継続してきたが、一つの転機が訪れる。新島会館の建設である。一九二六年（大正一五）一月二三日に開催された理事会記録には決議事項として「七、校友会館建設ノ為メ旧新島邸構内空地貸与ノ件」とあり「校友会長ヨリノ願出ニ依リ新島先生宅地ノ空地ノ部分ヲ貸与スルコト」と議決されている。<sup>(22)</sup> 創立者の旧宅の南側の空地部分という、校友としても特別な場所に校友の為の会館が建設されることが校友会関係者を鼓舞したことは想像に難くない。実際に、理事会の決定から一年半後あたりから、校友会の人々による建設資金の募金活動が積極的に展開された。<sup>(23)</sup> なお、校友会館設置は同志社創立五〇周年を記念した校友会の重要行事で、同時に校友会が『同志社五十年史』も編纂するなど、校友会の活動がそもそも活性化する時期であった。

校友会館は名称を新島会館として一九三二年（昭和七）二月二九日に開館式が挙行された。新島会館の完成に伴い、同時期に開館の維持管理を目的として新島会館維持会が組織された。<sup>(24)</sup> 維持会は「同志社校友会員及同窓会員ノ有志」<sup>(25)</sup>、すなわち、同志社内男子部と女子部の出身者らで構成された組織である。ちょうど維持会が設立した年の六月一四日、新島襄の妻・八重が永眠し、新島会館北隣にある新島夫妻の旧邸の管理が問題となっていた。ただし、既に八重は同志社に自宅を寄贈しており、一九〇七年（明治四〇）五月時点で同志社に受け入れられていた。<sup>(26)</sup> この点については、維持会の報告によると、「新島会館維持会は同志社より、旧邸維持の委託を受け、之を以て新島会館維持会事業の一つとなす方針に決定し目下維持方法細目を協議中」とある。<sup>(27)</sup>

校友会の資料を確認する限り、管理主体である同志社が校友会に新島夫妻旧邸の管理を維持会に委託したということになる。なお、同志社側には管見の限り記録はない。

続いて、維持会は一九四〇年に同志社が創立六〇周年を迎えるにあたって周年事業を計画した。維持会の一九三五年一月三十日付「第三回常務委員会記録」には、協議事項の一つ目として「母校創立六十周年記念行事ノ件」があり、二つの案が挙げられている。ひとつは「新島先生記念博物館ノ建設」、もうひとつは「新島先生遺芳帳（遺物集）出版」である。<sup>(28)</sup>前者が同志社の歴史において初めて言及された学校史に関係した博物館構想になる。

「第三回常務委員会記録」において、新島襄先生記念博物館は「松江市在ノ小泉八雲記念館ト同様ノモノヲ作レバ総工費五千五百円位ヲ要ス」と説明されている。島根県松江市にある小泉八雲記念館は、同館HPによると、八雲の永眠後に教え子やゆかりの人物たちにより遺品を収集し、記念館建設のための募金活動を展開して一九三三年（昭和八）一月に完成し、募金運動では約六、五一〇円が集まったとある。<sup>(29)</sup>維持会は直近の近似事例として小泉八雲記念館を想定し、同様の形式を想定して新島先生記念博物館構想を練り上げた。

維持会の具体的な博物館構想は「新島先生記念博物館建設趣意書案」（正確な作成年不詳、以下、「趣意書案」と略す。）にまとめられた。「趣意書案」は前置きに続き、新島が残した遺品について「内的には生ける先生に接して其の教を受くる想ひあらしめ外的には、其等遺物が渾然として一体系をなし、明治文化史上に祭然たる光輝を放っています」と評し、博物館建設の意義を次のように記している。

「之等のものを先生の伝記、其他同志社関係の諸文献と共に千歳の後に伝へ、吾等の子々孫々に至る迄之

によりて先生の高風と偉大なる足跡とを仰がしめ、且つ吾等も之に接し、とこしへに生き給ふ先生の御声を聴くのよすがとす可きであります。」

このように、維持会が構想した博物館は、創立者の事績を振り返り、その功績を礼讃する性格の強い展示施設である。当時の維持会及び校友会には新島襄に教えを直接受けた人物も所属していたことを鑑みれば、設立目的はこのようになってしかるべきであろう。

維持会は、こうした目的を前提として「小博物館を先生旧邸内に建設することは最も当を得たるものなること」と博物館の設置場所を隣接する新島旧邸内に設けることを企図した。旧邸内敷地の建設場所、建築様式及び竣工予定については、「趣意書案」に掲載した「新島先生記念博物館建設要綱」にて「七、建設ノ位置ハ、現在旧邸ノ門長屋ヲ敷地内東北隅ニ移転シ、其ノ跡ヲ使用ス」、「八、建物様式ハ現在ノ門長屋ト全ク同様ノ外觀ヲ有スル鉄筋コンクリート平屋建ニシテ内部ヲ書庫、閲覧室、陳列室、予備室、手洗場所二分ツ」、「九、竣工期、昭和十年十一月三十日」とある。<sup>(30)</sup> ここにある門長屋とは、かつては新島襄の両親が寓居した家屋を指す。この家屋を敷地内で移築したのちに、門長屋と同様の外観をもつ、鉄筋コンクリート構造の小さな博物館を門長屋のあった場所に建設する計画である。

結果として、「趣意書案」がこの後に検討、審議された記録は現時点では確認できていない。同志社の理事会記録にも記録がない。そのため、成案にすら至らなかつた可能性がある。しかし、この博物館構想は同志社に刺激を与えた。その証左が一九四二年（昭和一七）の新島先生遺品庫の建設である。

(2) 新島先生遺品庫設置とその意義

同志社が一九四二年一月二八日付でまとめた「新島先生遺品庫建設経過報告」には、その冒頭に「新島先生遺品庫ノ建設ハ今ヨリ十年前新島先生旧邸内ニ建設ノ議アリタルヲ始メトシテ久敷ニ亘リ待望セラレタリ」とある。維持会の博物館構想が一つの契機として新島先生遺品庫（以下、遺品庫と略す。）建設に刺激を与えたことが窺われる。続けて「昭和十五年新島先生五十周年記念事業會成ルヤ事業ノ一トシテ之ヲ企画シタルニ校友池田庄太郎氏ハ率先シテ之ニ淨財金一万円ヲ投ゼラレ此ノ企画ヲ完成ニ到ラシメラレタルハ関係者一同ノ深ク欣幸トスル所ナリ」とある。遺品庫建設は新島襄永眠五十年記念事業として卒業生の池田庄太郎（一九一六年同志社普通学校卒業）からの一万円の寄付を中心に建設された。同報告には設計を一柳建築事務所が、施工を株式会社清水組が請け負ったことも記載されている。遺品庫は記念事業の一環として計画された施設である。

遺品庫建設が提案された頃、同志社では周年記念が連続する時期であった。一八七五年（明治八）の創立以来、五〇周年記念（一九二五年）、六〇周年記念（一九三五年）、新島襄永眠五〇年（一九四〇年）と比較的短い期間で周年事業が展開され、同志社あるいは校友会が各々独自の事業を計画し、実施していた。維持会の博物館構想が創立六〇周年記念事業として位置付けられていたことは先述のとおりである。

遺品庫建設は、東京での記念講演会や東京と大阪の高島屋で実施された新島襄の遺品の展覧会を含めた新島襄永眠五〇年の記念事業の一つとして位置付けられていた。そのため、同志社では一九四〇年三月二〇日発行『同志社新報』第四五号紙上にて「新島先生五十年記念事業」と称して「遺品補強費」（五、〇〇〇円）、「遺品

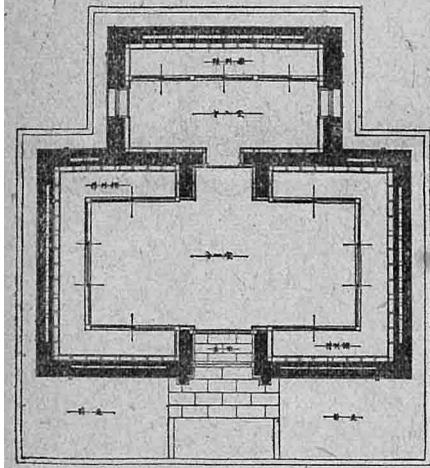
庫一棟新築費」(三、〇〇〇円)、「遺品保存費」(五〇〇円)、「遺跡五ヶ所石標建設費」(五〇〇円、候補地は「江戸生誕ノ地」、「函館乗船ノ所」、「大磯永眠ノ地」、「京都住宅」、「墓地道しるべ」)、「遺品展覧会講演会其他諸費」(二、〇〇〇円)、合わせて合計一〇、〇〇〇円の募金を呼び掛ける記事を掲載した。<sup>(34)</sup>掲載するや否や校友から反応があり、翌月発行の『同志社新報』第四六号において「池田氏の美挙 新島先生遺品庫建築費に一万円の寄付」<sup>(35)</sup>が掲載された。先述の池田が三、〇〇〇円を募集していた遺品庫建築に単独で一〇、〇〇〇円を寄附したことを知らせる記事である。その記事で池田は「遺品庫は新島先生の御精神を伝えるべき最も大切な物であるから出来るだけ完全なものを造られ度い、計画の如く三千円では不完全と思ふ、自分は一万円を寄附するから遺品庫の為にのみ之を費してもらい度い」と訪問を受けた校友会関係者に述べている。池田の寄付の申し出により、遺品庫はかつて維持会が構想した博物館施設よりも潤沢な資金を利用して建設されることになった。かくして、遺品庫は一九四一年(昭和一六)六月ごろに着工し、一〇月一八日に定礎式挙行、一九四二年(昭和一七)二月ごろ完成し、暫く曝涼期間を置いたのち、十一月二八日に開館した。<sup>(36)</sup>建築費はさらに増額されて一八、〇〇〇円、面積二四・五坪(約八一m<sup>2</sup>)、煉瓦造瓦葺平屋建、当時の図書館(現在の啓明館)南側に建設された。<sup>(37)</sup>

かくして遺品庫は、創立者に関係する資料を展示する、同志社史上初の独立した施設として誕生した。この意味で、遺品庫の誕生は同志社における大学アーカイヴズの展示活動の嚆矢と位置付けられる。ただし、遺品庫の内実は展示に特化した施設であった。『同志社新報』紙上で公開された遺品庫の設計図を見ると、館内は第一室と第二室という二つの大小の部屋で構成されており、全ての部屋に陳列棚が設けられている。<sup>(38)</sup>現在、セクターに建築図面が残されていないため、遺品庫創建時の実際の設計図と『同志社新報』紙上で公開された設計

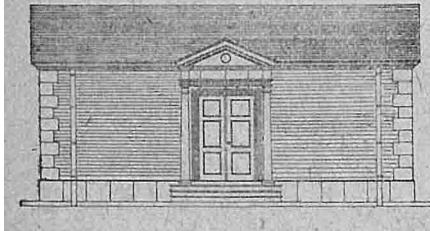
遺品庫の設計図

(圖計設の庫品遺)

〔圖面平〕



〔圖面正〕



『同志社新報』第59号 1941年6月20日発行より転載

図の相違を確認できないが、少なくとも遺品庫は資料保存を意識した構造ではなかった。さらに、時代背景も関係していると考えられるが、遺品庫は展示に適した温湿度管理が可能な施設でもなかった。ともあれ、これ以降、同志社は専用の展示施設を所有することで、継続して遺品庫での展示活動を展開していくことになる。

(3) 新島先生遺品庫の展示活動

遺品庫で開催された最初の展示は、開館と同時に開始した「新島先生遺品庫開館記念展観」(主催…財団法人同志社)である。新島襄の旧蔵本を除き、新島の全生涯に関わる資料や遺品が少なくとも四九タイトル一八

点が陳列目録に記載された。<sup>(39)</sup>ただし、この時に配布された陳列目録には、資料リスト以外には日時を一九四二年一月二八日、場所を新島先生遺品庫と記すのみで、展観の開館日時の詳細は不明である。開館日当日のみの開催であった可能性もある。

ともあれ同志社において学校史に関わる展示施設が初めて確立し、展示活動が始まるが、同時に、遺品庫の存在は同志社に関する資料を所有する人々を大いに刺激し、同志社への資料寄贈の呼び水となった。卒業生などの同志社関係者に向けて『同志社新報』紙上で、募金活動、池田の募金、そして、建設着手が報じられた<sup>(40)</sup>後から、同報紙上に資料寄贈の記事が掲載されるようになった。少なくとも開館式挙行迄、四回にわたり資料寄贈記事が掲載された。<sup>(41)</sup>新島の教え子やかつて新島と交流があった人物の子孫だけでなく、新島の親族関係者も寄贈者として名を連ねた。しかし、開館以降は同報紙上で寄贈資料が報じられなくなる。当時は戦時下であり、同報紙面は戦争に関する記事が戦局に応じて多数を占めるようになっていた。そうした状況下で遺品庫建設の募金から完成までが報じられていたが、一九四二年以降は状況が変わったと推測される。ただし、資料寄贈の申し出は継続していた。戦後、一九七七年（昭和五二）の時点で遺品庫収蔵資料は『新島先生遺品庫収蔵目録』上下巻にまとめられるほどの点数に達していた。河野仁昭氏によれば、一九八九年（平成元）当時で収蔵資料は六、〇〇〇点を超える<sup>(42)</sup>とされている。遺品庫完成時の収蔵点数は不明であるが、遺品庫完成からおおよそ半世紀で相当数の資料が寄贈され巨大な資料群となっていたことは確かである。同時にこの時点で既に遺品庫の収蔵キャパシティーは限界に達していたと推測される。

このように収蔵資料が漸次増加していく中で、遺品庫はその本来の目的である新島襄や同志社の初期の資料を公開するという役割を担ってきた。同時に遺品庫は一九四一年三月理事会において大学図書館貴重書庫とし

て新島関連資料を収集することが議決されている。<sup>(43)</sup> 遺品庫は展示施設として建設されながら、その初期から資料保存の役割も課せられた施設となった。なお、当初は大学図書館が遺品庫を管理していたと考えられるが、その運用形態に関する資料は現時点では発見できていない。

遺品庫の運営形態が記録に残り始めるのは、一九六三年（昭和三八）以降である。この年、創立九〇周年を目前に控えた同志社では、創立一〇〇年に備えて、蓄積されてきた未整理資料を整理する同志社社史史料編集所（以下、編集所と略す。）を学校法人同志社本部付で設置した。<sup>(44)</sup> その際に理事会より編集所に課せられた職務の一つが、「新島先生遺品庫の管理及び新島研究会との連携」であった。<sup>(45)</sup> 一九六三年に同志社において大学アーカイヴズの起点となる編集所が設置されたことで、同志社における大学アーカイヴズの活動として遺品庫の展示活動を位置付けることができる。しかし、その展示活動は遺品庫が創立以来担ってきた新島襄関連資料の展示が中心で、その枠を出ることはなかった。

編集所が担当となった遺品庫での展示活動について、その全体像を把握できる資料を現時点では確認できていないが、展示活動は継続していた。編集所への遺品庫移管後で展示活動最古の記録は一九六四年（昭和三九）六月一六日から二〇日の五日間、新島襄が密出国を敢行してから一〇〇年目の節目に開催した遺品庫一般公開に関する新聞記事である。<sup>(46)</sup> その他、残された記録は、「同志社創立九七周年記念 文書で見る『同志社創学』展（一九七二年（昭和四七）一月二五日～二七日）、同志社創立九八周年記念新島遺品庫公開（一九七三年（昭和四八）一月二五日～二九日）、昭和四九年度秋季新島遺品庫公開（一九七四年（昭和四九）一月二六日～三〇日）、昭和五〇年度夏期新島遺品庫公開（一九七五年六月七日～一日）」などがある。<sup>(47)</sup> これらの資料から遺品庫は少なくとも一年に二度、春と秋に五日間程度一般公開されていたと推測される。しかし、

月日が経るごとに状況は変化し、河野氏は一九八九年頃には「収蔵資料六〇〇〇点を越えるに至った偏在では、展示施設としての機能をほとんど失っている。適当な収蔵庫が他にないからである。だから今では春秋二回（五月と十一月の第三週）、資料を厳選して展示公開するのが関の山である。」<sup>(48)</sup>と、寄贈資料を受け入れ続けてきた結果、遺品庫が収蔵庫化してしまっている現状を書きとどめている。遺品庫はそもそも小型の展示施設であり、将来の収蔵資料数を想定せずに建設された。そのため、その後も陸続する寄贈の申し出に長期間対応できるような施設では無かった。完成から半世紀を経て遺品庫はその役割の変革を求められることになった。

なお、遺品庫が収蔵能力の限界を迎える前に、同志社内に再び博物館設置を目指す動きがあった。一九七〇年代に大学校地学術調査委員会調査主任であった鈴木重治氏は、執筆した「博物館のもつ教育力——同志社にふさわしい博物館の設置を——」において、同志社大学田辺キャンパス開校（現・京田辺キャンパス）に伴って同志社総合博物館設置が構想されていたことを指摘している。鈴木は理事長室でこの構想に伴って作成された博物館本館の建築設計図面を実見したようで、「展示室には三つの柱が検討されていた。一つが同志社の史資料室関係であり、他の二つは、自然史関係の加藤コレクション及び急速に蓄積されつつあった考古学関係の出土品<sup>(49)</sup>」と記している。鈴木は、この構想は日の目を見なかったと表現しており、理事会記録などでも公に議論された形跡はない。一九八六年（昭和六一）に田辺キャンパスが開校したのちも総合博物館は建設されていない。右記の三つのテーマのうち、考古学資料を中心とした歴史資料館が一九九六年（平成八）に設置され、二〇一三年（平成二五）には同志社関連資料を中心とした展示施設同志社ギャラリーが開設されたにすぎない。

#### 四 新しい展示施設の開設

##### (1) Neesima Room 開設

遺品庫は一九九〇年頃にはその収容能力が限界に近付き、設立当時の役割が十全に果たせなくなっていたが、この状況が変化する契機が訪れる。一九九四年（平成六）四月に実施された田辺キャンパスへの工学部（現・理工学部）全面移転である。

田辺キャンパスは一九八六年四月、新しく京都府南部の綴喜郡田辺町に開校した。その敷地面積は約九二・六万㎡と、今出川キャンパス（約一〇・二万㎡）のおよそ九倍となる<sup>(50)</sup>。当時、同志社では大学入学者数増加に伴う今出川校地の狭隘化が深刻な問題で、校地の面積は「大学設置基準」を満たしていなかった<sup>(51)</sup>。この狭隘化を解消し、新たに学校を発展させる土台となることを期待されたのが田辺キャンパスであった。この延長線上に一九九四年の工学部移転があった。

工学部が移転した後、工学部が利用していた建物のうちハリス理化学館の二階に展示室 Neesima Room（二六・二・二㎡）が一九九五年（平成七）に設置され、二月より展示を開始した<sup>(52)</sup>。Neesima Room の名前の由来は、創立者新島襄の英語名 Joseph Hardy Neesima に依る。その名前が示す通り、この展示室は遺品庫の展示活動の後継施設であった。他方、遺品庫はその役割を資料の収蔵に特化することになる。一九九九年（平成一一）三月ごろに一九九九年度中に二ヶ月の工期で改修工事を実施することが運営主体で編纂室の後身である社史資料室<sup>(53)</sup>（以下、資料室と略す）に伝えられ<sup>(54)</sup>、一九九九年二月末から二〇〇〇年（平成一二）三月迄まで

工事が実施され、<sup>(55)</sup>外壁からの熱の影響を受けにくい二重化された壁面構造をもつ、二四時間温湿度管理が可能な収蔵庫となった。<sup>(56)</sup>資料室には、遺品庫の改修により、はるかに広い展示室と専門の収蔵庫を備え、展示活動に適した環境が揃ったかのように見える。しかし、収蔵庫と展示室が異なる建物に存在するため、資料出し等の作業では外気と資料の接触を如何に忌避するかに配慮しなければならなくなった。加えて、編集所は大学への移管によって名称を資料室と変更し、事務室はクラーク記念館から啓明館へと移転した。収蔵庫と展示室、そして事務所すべてが別の建物に存在するため、資料や展示施設の管理が難しくなった。この状況は二〇二一年（令和三）の現在も継続し、展示室の管理については後述のように改善されているが、根本的な問題解消には至っていない。

一方、ハリス理化学館に設置された *Neesima Room* は遺品庫の展示スペースと比べて面積が単純に二倍となった、展示専用ケースが備わった施設であったが、館内には他の事務部門の事務所があり、それらの事務所と同様に空調設備は一般的な設備であった。そのため、展示環境の維持は *Neesima Room* 設置以来の重要な課題であった。ただし、*Neesima Room* は大学歴史資料館分館と位置付けられて、一九九六年四月一日付で京都府教育委員会より博物館相当施設の指定を受けており、<sup>(57)</sup>のちの展示活動の展開に有意となった。

## (2) *Neesima Room* 企画展の実態

一九九五年に設置された *Neesima Room* は後継施設となる同志社ギャラリーが開設されるまでに特別展一回（臨時に実施した展示会）を含め四三回の企画展を実施した。各回のテーマ、主催、協力、期間、開館日数、入場者数は後出の表1のとおりである。

Nesima Roomでの展示活動は、基本的には遺品庫の展示活動を引き継ぎ、その内容を単純に質的量的に拡大したものである。とりわけ、設置当初は年三回企画展を実施し、年間開館日数は二五〇日から三〇〇日であった。年に二回程度、数日程度の短期間に限られていた遺品庫の展示活動が大幅に広がったことは表1が示すとおりであるが、一般的な資料の展示期間と比較すれば明らかに長く、展示環境の保全、展示活動に起因する資料への悪影響などに一層注意を払わねばならない状況であった。当時の規程には「Nesima Roomの管理運営に関すること」<sup>(58)</sup>とだけあり、その具体的な内容は担当者の自由裁量であった。ただし、展示テーマは遺品庫の展示方針を逸脱するものではなかった。また、来室者も当初は一、〇〇〇人程度と少なく、入場料も無料で、あくまで新島襄と新島が関係した歴史を公開する小さな展示室であった。

確かに、Nesima Roomは遺品庫の展示活動を継承していたが、二〇〇六年(平成一八)頃から既存の目的を超えて展示テーマを設定する試みが見られるようになる。契機は資料室の組織変更であった。一九九五年の法人の事務機構整理によって資料室は大学人文科学研究所に属する一機関となっていた。明確な時期は不明ながら、資料室と人文科学研究所の将来の組織的合併について議論されていたが、最終的には組織的合併には至らず、<sup>(59)</sup>資料室は二〇〇四年(平成一六)五月に部課相当レベルの同志社社史資料センターとして独立した。<sup>(60)</sup>独立に伴い、業務内容が新たに追加され、なかでも「同志社社史編纂に関すること」<sup>(61)</sup>が「同志社社史資料センター規程」に明記されたことでセンターの展示活動は遺品庫から受け継いだ活動の枠組みを超えて展示テーマを設定することが可能となった。したがって、第二九回から第四三回までの企画展テーマの広がり、学内他部署との協体制、学外諸団体との共催など、同志社をテーマの基軸とし、人物、宗教、地域などをもう一つの軸として、その交わりから見出される歴史的トピックが展示のテーマとなっていく。テーマが多様性を持つに

表 1 Neesima Room で開催された企画展一覧表

回数	タイトル	主催/共催	協力/後援/その他	期間	実施 日数	総入館 (入室) 者数
第1回	徳富蘇峰	社史		1995年2月1日～5月13日	83	1,080
第2回	手紙に見る新島襄の生涯	社史		1995年6月12日～10月31日	109	1,991
第3回	同志社の開校と京都	社史		1995年11月5日 ～1996年2月29日	73	991
第4回	新島襄の日本と世界	社史		1996年3月12日～5月31日	65	1,513
第5回	新島襄の遺志を継いだ人々	社史		1996年6月10日～10月31日	103	1,778
第6回	新島襄の少年時代 ——版国まで——	社史		1996年11月11日 ～1997年3月22日	100	970
第7回	新島襄のアメリカ時代	社史		1997年4月2日～7月15日	93	966
第8回	新島襄の大学設立への挑戦	社史		1997年7月25日～11月6日	82	1,075
第9回	新島襄と徳富蘇峰	社史		1997年11月15日 ～1998年3月20日	83	470
第10回	新島襄とキリスト教伝道	社史		1998年4月1日～7月11日	94	919
第11回	新島襄の書と絵	社史		1998年7月22日～10月31日	65	1,626
第12回	新島襄に送られた手紙	社史		1998年11月12日 ～1999年3月20日	97	796
第13回	明治期の同志社	社史		1999年4月1日～7月10日	90	1,682
第14回	新島襄と関西	社史		1999年7月21日～10月30日	62	1,262
第15回	熊本バンドの人たち	社史		1999年11月16日 ～2000年4月28日	122	938
第16回	新島襄・同志社ゆかりの牌	社史		2000年6月1日～9月14日	93	1,213
第17回	同志社125周年のあゆみ	社史		2000年10月16日 ～2001年5月31日	91	2,724
第18回	『現代語で読む新島襄』の世界	社史		2001年2月15日～5月31日	98	2,214
第19回	同志社の肖像画	社史		2001年7月2日～9月29日	68	1,713
第20回	同志社と女子教育	社史		2001年11月1日 ～2002年2月28日	98	2,486
第21回	同志社百景 ——風景画で見る120年——	社史		2002年4月1日～8月30日	130	3,372
第22回	『同志社山脈』の世界	社史		2002年10月1日 ～2003年2月28日	不明	4,838
第23回	遺品から見る新島襄	社史		2003年4月1日～8月29日	131	3,086
第24回	若王子に眠る人々	社史		2003年10月1日 ～2004年2月29日	146	2,508
第25回	函館からボストンへ	社史		2004年4月1日～8月31日	132	3,134

大学アーカイブズの展示活動の現状に関する一考察

第26回	徳富新峰と熊本バンド	社史			2004年10月1日 ～2005年2月28日	132	3,294
第27回	同志社とアームスト	社史			2005年4月1日～8月31日	132	2,653
第28回	新島襄と同志社	社史			2005年10月1日 ～2006年2月28日	122	2,283
特別展	アームスト大学特別展	社史			2006年3月14日～3月21日	8	154
第29回	躍動する同志社	Ambest College 社史			2006年4月1日～8月31日	134	1,929
第30回	戦後の同志社 1946～1986	社史			2006年10月2日 ～2007年2月28日	128	2,747
第31回	同志社と戦争 1930～1945	社史			2007年4月2日～8月31日	132	3,560
第32回	大正デモクラシー期の同志社 ——原田助経長と海老名正徳 長の時代——	社史			2007年10月1日 ～2008年7月31日	130	2,436
第33回	よみがえるクラーク記念館	社史			2008年4月1日～7月31日	113	2,791
第34回	早稲田と同志社 ——創立者の想いと交流から——	共催：社史、早稲田 大学文化推進部			2008年10月1日 ～2009年1月31日	103	2,571
第35回	同志社の表徴 ——エンブレムとデザイン	社史			2009年4月1日～7月31日	103	3,209
第36回	新島八重の生涯 ——進取と矜持——	社史		協賛：京都知恵と力の博覧会／協 力：会津若松市、会津若松市立会 津図書館、福島県立博物館、会津 武家歴史館	2009年10月1日 ～2010年1月31日	101	3,369
第37回	目的の大なる人物を ——創設期の学生たち——	社史			2010年4月1日～8月1日	108	2,261
第38回	幕末と同志社 ——薩摩藩邸址にあって——	共催：社史、同志社 大学歴史資料館			2010年10月1日 ～2011年1月31日	96	3,679
第39回	まかれた種 ——神戸女学院と同志社——	社史		協賛：学校法人神戸女学院	2011年4月1日～7月31日	114	3,088
第40回	京都の中の同志社——相国寺、朝 庭と明治の近代化——	主催：社史／共催： 同志社大学歴史資料 館		出展協力：島津製作所創業記念資 料館	2011年9月28日 ～2012年1月31日	108	4,050
第41回	同志社スポーツ ——若草萌えて——	社史		協賛：同志社スポーツユニオン／ 同志社スポーツトム羅集局	2012年4月1日～7月31日	113	4,570
第42回	会津と八重 ——八重を育てた故郷——	主催：学校法人同志 社／共催：福島県、 会津若松市、福島県 観光物産交流協会		協力：福島県立博物館、若松城天 守閣郷土博物館、会津武家歴史館、 白河市歴史民俗資料館、二本松市 歴史資料館／後援：白河市、二本 松市、京都府、京都市、NHK 京 都放送局	2013年3月26日～6月30日	77	17,976

各種情報は同志社大学同志社社史資料センターの事務文書から抽出した。なお、主催者の表記は同志社社史資料室及び同志社社史資料センターを社史と略した。

いたると入場者数も少しずつ増加し、学内外へセンターの展示活動が周知されていくことになる。しかしながら、資料室からセンターへと組織変更したのちも実施日数が一〇〇日を超える設定を余儀なくされていた。よって、展示期間を短縮せず、同時に展示環境による資料の劣化を防ぐために、テーマごとに出陳する資料数を増やして五〇日程度を目安として展示替えを実施するなどして資料への負担を最小限に抑えつつも、従来の展示期間を維持しながら展示室を運営するなどの工夫をセンターは実施する必要があった。<sup>(62)</sup> そうした中で、二〇一三年（平成二五）に展示施設及びその運営体制が一新されることになる。きっかけは同志社創立一三五周年記念事業である。

### (3) 同志社ギャラリーの開設

同志社は二〇一〇年（平成二二）に創立一三五五年を迎えた。これを記念して、同志社はキャンパス整備を中心とした記念事業、講演や展示、記念模型の制作などを中心とする記念行事、そして記念事業に対応した記念募金で構成される同志社創立一三五周年記念事業を実施した。<sup>(63)</sup> この事業のひとつである大学キャンパス整備事業において、Nesima Room があるハリス理化学館は、館内の各事務所が別の建物に移転したのち、教学施設としての館の在り方が課題となり、大学長の諮問に基づいて二〇〇九年（平成二一）ハリス理化学館構想検討委員会が設置された。<sup>(64)</sup> 検討委員会は一年間の審議を経て、二〇一〇年三月三十一日付で「ハリス理化学館の構想について（答申）」<sup>(65)</sup> を示した。この答申において構想検討委員会は、コンセプトとして「キャンパスを訪れた人が、まずは立ち寄って同志社を感じ、知ることができるところとすることが、ハリス理化学館構想の核心」とし、このコンセプトを体現する複合的施設を「ハリス理化学館新島記念ギャラリー」<sup>(66)</sup>（仮称）とし、具体的な

事業項目として(1)常設・企画の展示、(2)新入生初年次教育や留学生オリエンテーションとの連携、(3)新入社員(教職員)研修との連携、(4)法人内諸学校における正課・課外活動との連携、(5)講習会・研究会の開催、(6)その他の関連事業の展開の場とすることを提言した。館の運営に関しては新設部署を設けず、「企画運営委員会」を組織して事務局を同志社大学同志社史資料センターに置くとしている。この答申は、Nesima Room が担っていた役目をはるかに超えて、「同志社を知る」という目的のために幅広い展示活動が期待された構想であった。しかし、センターが事務局を兼任することになるため、答申内容を実現するには、新たな人員と資金が必要となる。答申にはセンターの人員増強が書かれた程度であった。

この答申を受けて、答申内容を具体的に検討するため、二〇一二年(平成二四)一月一日から二〇一三年(平成二五)三月三十一日までの任期で「ハリス理化学館新島記念ギャラリー(仮称)設置検討委員会」が設置され、加えて答申案の具体的な内容検討のために作業部会が設けられた。<sup>(67)</sup>設置検討委員会は作業部会の意見を踏まえて一回の会議を通じて、二〇一二年六月二一日付けで「ハリス理化学館新島記念ギャラリーの内容について(答申)」<sup>(69)</sup>を大学長に提出した。設置検討委員会はこの答申で「学生・教職員の利用に供し、校友・同窓とともに愛校心を喚起し、来校者・一般の人たちには同志社を啓蒙するシンボル・タワーとして、学術・教育に貢献することを目的とする」として、名称を「ハリス理化学館同志社記念ギャラリー」へと変更した。創立者の名前を外した背景のひとつに、設置検討委員会委員長による「この建物を純粋な博物館とするつもりはない。同志社館としたい」という意見の影響がある。<sup>(70)</sup>展示室については一階を同志社、二階を同志社関連のフロアと位置付け、一階には常設展示室として「新島襄の部屋と同志社のあゆみ」と「同志社の今」の二室を設け、同志社の歴史と現在を展示し、二階には中世から近代にいたる京都の歴史の中に今出川キャンパスや同

志社を位置付け、大学歴史資料館の資料を用いて運営する常設展示室「京都の中の同志社」と、多種多様なテーマで展示を行う「企画展示室」を設置するとある。これらの方針を基本として、作業部会で館内の展示構成に関する議論を重ね、内規として「ハリス理化学館同志社ギャラリーの運営体制、利用形態に関する申合せ(案)<sup>(71)</sup>」(以下、「申合せ案」と略す。)をまとめた。「申合せ案」では「2管理体制」の項にて、一階に設置する常設展示室1(同志社のあゆみ)、常設展示室2(新島襄の人と思想)、展示室1(外国人たちと同志社、開館時には世界の中の同志社に名称変更)、展示室「同志社の今」を同志社社史資料センターが、二階に設置する展示室「京都の中の同志社」は大学歴史資料館が、展示室2(J・N・ハリスと同志社)はセンターが管理運営すると定められた。これらはいずれも常設展示である。また同項にて、企画展を実施する企画展示室は当面、大学歴史資料館とセンターが交代で展示を実施し、他の企画展も適宜行うとある。この申合せによる展示室の部屋割が採用され、同志社ギャラリーは二〇一三年一月二十九日に開館し、現在に至る。なお、名称のうち「記念」の文言削除は二〇一三年度第一五回部長会にて正式決定された。<sup>(72)</sup>

このように同志社ギャラリーの誕生は同志社創立一三五周年記念事業の一つである大学キャンパス整備計画の付随事項であり、博物館の誕生を目指したわけではなかった。ただし、Neesima Room が担った創立者及び同志社史に関するテーマ展示の実践は受け継がれ、ギャラリー内で企画展示室にその性質が受け継がれた。加えて、センターは、ギャラリー開館時にこれまでの展示活動に加えて常設展示室六室のうち五室を管理することとなり、展示活動が質的量的に相当程度拡大した。ギャラリーには部署が新設されず、運営は委員会が行い、事務局はセンターが担うという変則的な運営方式を採用するに至ったため、<sup>(73)</sup> ギャラリー開設によって発生する業務量負担は、社史資料調査員(非常勤嘱託職員)一名の採用で軽減を図るにとどまった。<sup>(74)</sup> 同志社におけ

る大学アーカイヴズの展示活動の拡大と深化という意味でギャラリーが果たした役割は絶大であるが、一方で展示環境の整備は完全には行われず、博物館の再指定に関する議論はなされず、展示活動を実施する施設として運営するには、相応の自助努力が必要となった。現時点においてもギャラリー全体の展示環境維持が喫緊且つ恒常的な課題となっている。

#### (4) 同志社ギャラリーにおける企画展示

同志社ギャラリーは、常設展示室五室を同志社史資料センターが、一室を大学歴史資料館が担当すること  
で運営が始まった。他方、企画展示については表2のように現在(二〇二一年九月)までに特別展三回、企画  
展二二回を実施している。そのうちセンター担当が一七回(第三回企画展は実質的にセンターが主催のため加  
算した)、歴史資料館担当が六回、外部からの持ち込み企画が二回である。企画展とは、センターもしくは歴  
史資料館が各部署の事業として実施し、運営委員会の承認を得て実施される展示である。特別展は運営委員会  
の承認を必要としない、常設展示の延長線上で実施される展示である。ギャラリー開館後の企画展は、セン  
ターが実施した企画展に限ると、同志社の歴史全般を対象とし、創立者や学校史をテーマとするだけでなく、  
同志社が輩出してきた人物が培った国内外の人脈や地縁を頼りに学校の社会的役割に焦点を当てたテーマも設  
定している。また、最新の企画展では新制大学以降、社会の変化に対応して実践されてきた現行制度の一事例  
として、社会的影響を受けながら深化・発展している障がい学生支援制度を取り上げ、その成立過程だけな  
く、過去の同志社の歴史における障がい学生への対応を資料で示し、現行制度を冷静に見つめ直す視点を提供  
することが企図された。センターが実施を予定している次回の展示(二〇二二年一月より実施予定)では、明

表2 同志社ギャラリーで開催された企画展一覧表 (2013年11月～2021年9月)

種別	タイトル	主催/共催	協力/後援/その他	期間	総入館 (入室) 者数
第1回 企画展	新高襄と八重	同志社社史資料センター	協力：福島県、会津若松市、福島県立博物館、若松城天守閣城土博物館、日本基督教団、同志社教会	2013年11月29日 ～2014年2月28日	17,572
第2回 企画展	森浩一の考古学——遺跡を共有する精神	同志社大学歴史資料館		2014年4月12日～5月25日	不明
第3回 企画展	新島襄渡航150周年新高襄の「蓬桑」の志	学校法人同志社		2014年6月5日～22日	3,682
第4回 企画展	同志社と絵画 カンパナスに広がる同志社キヤンパナス	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター		2014年7月15日～8月31日	9,778
第5回 企画展	同志社と文学	同志社社史資料センター	協力：同志社大学図書館	2014年10月15日～12月21日	不明
特別展	尹東柱没後70年 福岡・京都・東京 遺稿・遺品巡回展	尹東柱70周年忌詩碑建立20周年記念行事実行委員会	後援：学校法人同志社	2015年2月13日～17日	1,789
第6回 企画展	はじまりの地——ラットランドから寺町丸太町、今出川へ——	同志社社史資料センター	協力：学校法人神戸女学院、同志社大学人文科学研究所、同志社大学歴史資料館、同志社大学図書館	2015年4月21日～6月21日	13,460
第7回 企画展	細文具塚研究と酒話仲男 没後50年	同志社大学歴史資料館		2015年9月26日～11月8日	不明
第8回 企画展	奥村多喜衛生誕150年、同志社・ハワイ交流80年 ハワイに高知城をたてた男 奥村多喜衛 社・ハワイ交流前史	共催：「ハワイに高知城を立てた男 奥村多喜衛展」実行委員会、同志社社史資料センター	後援：高知県、高知県教育委員会、高知市、高知市教育委員会、高知城管理事務所、協力：こぎき聖城キリスト教会、高知市目田民権記念館、奥村多喜衛協会、全国同信伝道会、高知県立高知大手前高等学校、土佐塾中学・高等学校、清和女子中・高等学校、同志社校友会高知県支部、同志社同窓会高知支部、同志社大学図書館	2015年12月8日 ～2016年2月10日	8,710
特別展	同志社大学天文同好会創立五十周年 新高襄の見た宇宙	共催：同志社社史資料センター、同志社大学天文同好会	協力：同志社大学図書館	2016年5月10日～6月25日	7,939
第9回 企画展	考古もいつはいい！ 大学は宝箱！ 京都・大学ミュージアム連携合同企画展	主催：京都大学ミュージアム連携/共催：京都・大学ミュージアム連携参加校		2016年8月25日～9月18日	不明

大学アーカイブズの展示活動の現状に関する一考察

第10回 企画展	二條家文書の世界	同志社大学歴史資料館		2016年11月19日～12月3日	不明
第11回 企画展	同志社社史資料センター新収蔵品展——新島公義宛書簡等資料の紹介——	同志社社史資料センター		2016年12月6日～27日	3,791
第12回 企画展	同志社大学地学研究会創立50周年記念 新島襄が感じた地球	主催：同志社大学地学研究会・同志社社史資料センター		2017年5月16日～7月9日	12,240
第13回 企画展	弥生・古墳集落とモノ作り～京都盆地・淀川流域を中心に～	同志社大学歴史資料館		2017年10月14日～12月3日	不明
第14回 企画展	同志社社史資料センター2017年度新収蔵品展	同志社社史資料センター		2018年3月13日～4月28日	4,854
第15回 企画展	新島襄のかお	同志社社史資料センター	協力：京都市立芸術大学芸術資料館、徳富蘇峰記念館、同志社女子大学、同志社香里中学校・高等学校、同志社大学人文科学研究所／協賛：京都府明治150年京都創生	2018年8月1日～10月7日	16,009
第16回 企画展	学徒出陣75年 私学と兵役——同志社の学徒出陣	同志社社史資料センター		2018年11月1日～12月22日	8,559
第17回 企画展	森浩一の考古学2 考古学は地域に勇気を与える	同志社大学歴史資料館		2019年2月26日～3月24日	不明
第18回 企画展	新島襄と安中藩——安中古文書学習協議会の翻刻成果の公開——	主催：安中古文書学習協議会・同志社社史資料センター		2019年4月9日～6月9日	8,392
第19回 企画展	近代の夜明けとキリスト教——岸和田と同志社	主催：岸和田市教育委員会、同志社社史資料センター	協力：山岡家、日本基督教団岸和田教会	2019年7月2日～8月25日	8,776
第20回 企画展	フレンドーズハウス——ハロイから同志社へ——	同志社社史資料センター		2019年10月1日～12月1日	8,998
第21回 企画展	古代計帳に載るムラ——山背国愛宕郡出雲郷をめぐる考古学——	同志社大学歴史資料館		2020年3月20日～4月26日※1	1,059
特別展	同志社の145年——そのとき、学生たちは何を想ったのか——	同志社社史資料センター		2020年9月23日～12月1日	3,156
第22回 企画展	「支え合う志」をつないで——障がい学生支援制度発足20周年企画展——	主催：同志社大学学生支援機構障がい学生支援室・同志社社史資料センター		2021年3月19日～5月23日	3,015

各種情報は同志社大学同志社社史資料センターの事務文書から抽出した。なお、主催者の表記は同志社大学同志社社史資料センターを同志社社史資料センターと略した。

※1 第21回企画展は、新型コロナウイルス感染症の拡大によって発出された緊急事態宣言の影響で4月9日までの開催。

治後期に始まる私立学校の高等教育への渴望から、専門学校令、大学令、戦後の教育基本法及び学校教育法に基つき私立学校が高等教育を整備していく様を同志社を事例として資料で示し、同時に私立学校として、あるいはキリスト教主義を掲げる学校として抱えた苦悩と利点を示す展示を準備中である。<sup>(75)</sup>このように、ギャラリーが設立されて初めて国内外の社会における同志社の位置付けを考えるようなテーマ展開が可能となった。

#### (5) 同志社ギャラリーにおける特別陳列

ギャラリーにおける三つ目の展示形態として特別陳列がある。特別陳列とは、学内外の団体が運営委員会の承認を得て、ギャラリー一階にある常設展示室「同志社の今」で実施する展示の呼称である。ただし、展示の規模によっては企画展示室で実施する場合もある。二〇一三年の開館以来実施された特別陳列は後出の表3の通りである。

特別陳列は、学内外の人が同志社と関わり、活動するという理念が最も反映された展示活動である。基本的には同志社に関わる展示内容、もしくは同志社の関係者として活動する人々、特に学生らの正課及び課外活動の成果発表に使用されている。また、モノ資料を所蔵していない団体が写真パネルを利用したビジュアル中心の展示を実施する場合もある。大学内の団体が開催主催者の多数を占めるが、一般団体が同志社を通じて社会に問題の提起や喚起を行う展示などもある。特別出陳のために使用を許可する部屋の基本的な性格は貸部屋<sup>(76)</sup>で、そこで実施する展示は、運営委員会の管理下で、ギャラリーの展示活動方針を理解した上で運営されている。

## 五 終わりに——展示活動を通してみた現状と課題

同志社における展示活動は、明治期においては学校教育とリンクした、独自の目的を持った活動であったが、大学アーカイヴズに関わる活動ではなかった。転機は周年事業であり、同志社の場合、創立者の新島襄が四六歳一ヶ月という短命であったこともあり、永眠五〇周年の際には直接教えを受けた人々、そうした人々から影響を受けた人々、あるいは新島の親族らの協力により、創立者の資料や同志社の創設期の展示施設が完成した。その後資料収集が継続され、同志社において学校史に関わる初めての展示活動が一九四二年から開始された。こうしたケースは私立学校のアーカイヴズによくみられると考えられる。

同志社の場合、遺品庫の性格の影響で、展示の内容は自ずから創立者を中心とするテーマに限られた。さらに、遺品庫が必然的に展示室兼収蔵庫の役割を担ったため、将来の収容能力の限界を迎えることは容易に想像できた事態であった。また、遺品庫は展示活動を主目的とした施設であるため、資料の長期保存を可能とする収蔵施設としての能力には疑義があることは否めない。

こうした資料業務の相対する活動、すなわち保存と展示活動における問題点が抜本的に解消されたのは一九五年の *Neesima Room* 開設と二〇〇〇年の遺品庫の完全収蔵庫化であった。ハード面に問題は残るものの、保存と展示活動の事業仕分けがなされたことはその後も拡大する資料の収集・整理・保存・公開活動を可能とする意味では大きな意義があった。しかし、この時点においても、展示活動のテーマの範囲は従前と同様であった。テーマの拡大は、一九六三年から展示活動を担ってきた編集所が一九九五年の法人内事務組織の整理

表3 特別陳列一覧

(2013年11月～2021年9月)

回数	タイトル	主催/共催	協力/後援/その他	期間	実施日数
第1回	美術部クワラで画会創部100周年記念展～同志社学内展～	同志社大学美術部クワラで画会		2013年11月29日～2014年2月20日	59
第2回	東日本大震災・原発事故から3年――福島県の現場を考える	福島民友新聞社、福島中央テレビ	後援：福島県、京都府、京都市/協力：学校法人同志社	2014年3月11日～6月29日	89
第3回	松濤齋50年～第2の放蕩(おうち)～	松濤齋50周年記念実行委員会		2014年9月30日～11月2日	28
第4回	福島の現状 東日本大震災・原発事故から3年半余り	NPO法人ナルク京都「ことこの会」	協力：浪江町役場、福島県笹谷東部仮設住宅自治会まちづくりNPO新町なみえ、福島民友新聞社、福島民報社、京都新聞社、早稲田大学、高木波榮、同志社大学同志社社史資料センター	2014年11月21日～12月7日	15
第5回	同志社大学アート・オーケストラ・STORY Vol.5	Art Auction STORY ……Vol.5 実行委員会	運営：同志社大学経済学部科目「アート・ビジネス実践」受講生/協力：株式会社AGホールディングス	2014年12月13日～19日	7
第6回	同志社女子大学学芸学部情報メディア学科学二瓶ゼミ卒業研究成果発表展	同志社女子大学学芸学部情報メディア学科学二瓶研究室	協力：同志社女子大学学芸学部情報メディア学科学メディア学サポーターセンター	2015年2月6日～21日	13
第7回	同志社大学美術部クワラで画会オリエンテーション展	同志社大学美術部クワラで画会		2015年3月31日～4月26日	20
第8回	同志社女子大学学芸学部情報メディア学科学二瓶ゼミ卒業研究成果発表展	同志社女子大学学芸学部情報メディア学科学二瓶研究室	協力：同志社大学同志社社史資料センター、同志社女子大学学芸学部情報メディア学科学メディア学サポーターセンター	2016年2月13日～25日	9
第9回	春の学内展	同志社大学美術部クワラで画会		2016年3月29日～5月7日	25
第10回	里山ひととき展	同志社大学経済学部経済学科学部基礎ゼミナール	協力：NACS―J自然観察指導員奈良連絡会、奈良県高山茶産生産協同組合、やまおのび制作委員会、与名正三(フナトオノイヌ YONAI)	2016年5月10日～28日	16
第11回	ポスターに見る核廃棄物処理場反対運動 コアレーベン“ATOMKRAFT NEIN DANKE”	主催：コアレーベン・ポスター展京都巡回実行委員会/共催：主婦連合会、一般社団法人主婦会館、TEGAMI―Perspektiven japanischer Kinister	協力：Gorleben Archiv e.V.	2016年5月31日～6月25日	20
第12回	写真展「一体感―スポーツのうひとつの魅力―」	同志社大学同志社社史資料センター	協力：同志社大学学生支援センタースポーツ支援課	2016年7月29日～9月24日	39
第13回	後期展「みんなの秋、だれかの秋」	同志社大学美術部クワラで画会		2016年10月4日～15日	10

大学アーカイブズの展示活動の現状に関する一考察

第14回	国際コンベンション「21世紀の茶室」入選作品展 テーブル・新しい時代の立礼式茶室の空間デザイン	同志社大学京都と茶文化研究センター		2016年11月10日 ～2017年1月14日	45
第15回	写真同好会冬季写真展「水」	同志社大学写真同好会		2017年1月17日～28日	10
第16回	同志社女子大学芸学部情報メディア学科二取ゼミ卒業研究成果発表展	同志社女子大学芸学部情報メディア学科二取研究発表会	協力：同志社女子大学芸学部情報メディア学科メディアラボートセンター	2017年2月3日～18日	11
第17回	東日本大震災・原発事故から7年目の福島の状態	NPO法人ナルク京都「ごとの会」 同志社大学美術部 ラテ画会	協力：浪江町役場、福島民友新聞社、同志社大学同志社史資料センター	2017年3月14日～25日	11
第18回	春の学内展「いぶき」	同志社大学美術部 ラテ画会		2017年3月28日～5月6日	25
第19回	同志社大学地学研究会 地学に魅せられた五十年の軌跡、そして未来へ	同志社大学地学研究会		2017年5月16日～7月9日	48
第20回	後期展「秋の麗動」	同志社大学美術部 ラテ画会		2017年10月3日～15日	11
第21回	春の学内展「桜花爛漫」	同志社大学美術部 ラテ画会		2018年4月3日～28日	23
第22回	後期展「ちいさい秋」	同志社大学美術部 ラテ画会		2018年10月2日～13日	11
第23回	二回生展「粋」	同志社大学書道部		2018年10月16日～27日	10
第24回	同志社大学書道部展 玄冬展	同志社大学書道部		第一部：2018年12月4日～9日 第2部：12月11日～16日	12
第25回	同志社大学写真同好会 冬季写真展「救い」	同志社大学写真同好会		2019年1月8日～19日	10
第26回	同志社大学書道部卒部展「一里塚」	同志社大学書道部		2019年3月5日～10日	6
第27回	春の学内展「風光る」	同志社大学美術部 ラテ画会		2019年4月2日～21日	17
第28回	後期展「秋を魅せる」	同志社大学美術部 ラテ画会		2019年10月8日～20日	17
第29回	二回生展「魂」	同志社大学書道部二回生	協賛：同志社大学書道部後援会	2019年10月23日～11月2日	10
第30回	同志社大学書道部展 玄冬展	同志社大学書道部二回生	協賛：同志社大学書道部後援会	第一部：2019年12月10日～14日 第2部：12月17日～21日	10
第31回	春の学内展「春来る」	同志社大学美術部 ラテ画会		2020年3月31日～4月19日	※1
第32回	秋の学内展「秋立つ」	同志社大学美術部 ラテ画会		2020年11月4日～29日	20
第33回	卒展&クラテ画会展	同志社大学美術部 ラテ画会		2021年3月23日～28日	6

※1 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により延期。

を経て設置されたセンターの規定に「同志社社史編纂に関すること」が明記されたことによる。すなわち、二〇二五年に同志社が一五〇周年を迎えるにあたり、過去に編纂された『同志社五十年史』『同志社九十年小史』『同志社百年史』の成果を踏まえた上で新たに編む年史に貢献するという目的も展示活動に暗に付された。表2に示した展示テーマの展開は、センターの年史編纂のための情報収集・先行研究の蓄積という意味合いが強い。そのため、ギャラリー開設以降は、記録を残すために、可能な限り展示図録（六〇—一〇〇ページ程度）を作成している。将来の年史編纂を意識した展示活動とその成果を残すことがセンターにおける展示活動の意味と意義を確保している。

センターが主催する展示活動は、所蔵資料の公開という側面と、学外に存在する同志社社史編纂に関わる資料所在の調査と収集作業を兼ねた事業である。この考えの延長線上に常設展示室「同志社の今」における学内外の団体が行う展示活動もある。ただし、展示活動を十全に実施する施設もなければ独立した組織も存在しない。かつて学内で望まれた博物館構想は部分的には実現されたが、大学アーカイヴズの展示活動を含めた大学総合博物館の必要性に関する議論は、資料の永続的な保存と公開の継続性を維持するために必要であろう。同志社は二〇二一年に創立から一四六年を迎えたが、その歴史の蓄積を守ると同時に公開施設については未だに課題が山積しているのが実情である。こうした問題を解消しながら、展示活動については、社会に基軸を置き、私立学校の社会性に目を向けるような、新しい展示の展開を考えていく必要がある。将来の年史編纂への対応を念頭に、自校史研究及び自校史を客観視し得る研究を充実させ、かつ蓄積し、同時にその研究成果に対する一般社会の反応や評価を知り得る上で展示活動は有効な手段であり、資料関連業務において重要な位置を占めると言えるであろう。

注

- (1) 本稿で使用する同志社とは結社及び法人としての同志社を意味する。一八七五年に同志社結社、一九〇〇年に財団法人化、一九五〇年に学校法人化と時期により法人名は変化するがこれらを総じて同志社と称す。
- (2) 本稿では同志社の歴史を略して同志社史と記す。
- (3) 河野仁昭「同志社宗教博物館の顛末」『博物館学年報』第一六号、同志社大学博物館学芸員課程、一九八四年二月
- (4) 同志社宗教博物館設立之趣旨(上〇三六六) 新島遺品庫収蔵資料。なお、新島遺品庫収蔵資料はホームページ「新島遺品庫資料の公開」(<http://joseph.doshisha.ac.jp/hinko/html/a01/a01010/N0101001G.html>) で閲覧可能。
- (5) 設立委員「宗教博物館設立しニ付願書」一八九三年五月二九日付(同志社社史資料センター所蔵)。内容は次のとおり。「一新築の神学館中に宗教博物館を設る事 一別紙の如き趣意書を世間に二流布いたす事 一諸新聞へ短き広告を出し趣意書を投書する事 右三條早速実行仕度候間別紙御一覽の上御許し被下度候奉願候付てハ宗教博物館設立の義宜しく御承知置被下度候也 明治廿六年五月廿九日 右創立委員 湯浅吉郎 高山高吉 ゴルトン」、ファイル名「宗教博物館設立に付願書(付) 同志社宗教博物館設立之趣旨(14号の10) (小崎社長関係書類1)」(同志社社史資料センター所蔵)
- (6) クラーク神学館は一八九三年四月に上棟式、同年九月より授業で利用されたと記録にあるが、「趣旨」が公表された六月の時点の建設工事の進捗状況は不明。『平成二十年三月 重要文化財 同志社クラーク記念館修理工事報告書』京都府教育庁指導部文化財保護課、便利堂、二〇〇八年、二頁。
- (7) この報告書内の項目「同志社報告」に「神学校は又昨年度に入りエム、エル、ゴルトン、湯浅吉郎、松山高吉の三氏を挙げて委員となし宗教博物館の新設を企て仮にクラーク神学館内の一室を以て之れに充て四方の有志より寄寄せられたる物品を陳列せり」とある。『同志社明治廿六年度報告』同志社、一八九四年四月、二頁。

- (8) 各年度の報告書のうち、明治三三、三六、三七、四〇年度の報告には寄付物品の記載なし。河野前掲論文、二二―二九頁。
- (9) 河野前掲書、一五―一六頁。
- (10) 加藤延年「随想 博物館に籠りて」『我等の同志社』（同志社校友同窓会報）第一〇号）、一九三五年、二二頁。
- (11) 『同志社時報』第二三九号、学校法人同志社、二〇一五年四月一日発行、四九―五〇頁。
- (12) 『同志社時報』第八六号、同志社時報社、一九一二年三月二五日
- (13) 簿冊『明治三十二年七月起 同志社理事會決議録』所収（同志社社史資料センター所蔵）
- (14) 加藤前掲記事、二二頁。
- (15) 玉松公叙「紹介 加藤コレクシオン」『同志社時報』第五八号、学校法人同志社、一九七六年七月、四八頁。
- (16) 田邊利幸「同志社の逸品 加藤コレクシオン」『同志社時報』第一三九号、四九頁。
- (17) 当時の職員録を確認すると、一九三二年（昭和七）度までは同志社中学（同志社普通学校の後身）で博物学及び地理担当教員を務めたが、一九三三年（昭和八）度と次年度は地理の嘱託教員として、一九三五年（昭和一〇）度から一九三九年（昭和一四）度までは（ただし、一九三八年度は記録無）博物館事務の嘱託教員として名前がある。
- (18) 玉松前掲記事、四八頁。
- (19) 田邊前掲記事、四九頁。
- (20) 同志社高等学校ホームページ内コンテンツ「沿革」(<https://www.js.doshisha.ac.jp/high/About-Doshisha-our-history.html>)  
二〇二二年八月三十日確認)、「ギャラリーいわくら」(<https://www.js.doshisha.ac.jp/high/Galleries/arc/Archives/peji/Jyunakan-Album.html>)  
二〇二二年八月三〇日確認) 参照。なお、加藤コレクシオンを大学に移管する際に資料群の規模が縮小されたと筆者は聞いている。
- (21) 『同志社百年史』通史編一、学校法人同志社、一九七九年、六三三頁。

- (22) 「理事會記録 大正十五年一月二十三日開會」『同志社理事會書類綴自大正十四年至昭和二年三月』所収（同志社社史資料センター所蔵）
- (23) 「同志社校友同窓會報」第二二二号（一九二七年七月一日発行）で初めて建設募金の開始と成果が発表された。一年半の空白期間は、學生會館建設資金募金を優先させたためと説明されている。
- (24) 「新島會館維持會成る」及び「同志社新島會館維持會規則」『同志社校友同窓會報』第七一號、一九三三年一月一日発行、四―五頁。
- (25) 同志社同窓會とは同志社女子部の出身者及び女學校教職員らで構成される団体で、校友會とは別組織である。
- (26) 「同志社年表（未定稿）」同志社社史史料編集所、一九七九年三月、六〇頁。
- (27) 「同志社のマウントバーノン 新島先生旧邸 新島會館維持會に於て保存維持の方針に決定」『同志社校友同窓會報』第七四號、一九三三年四月一日発行、二頁。決定の経緯は不明瞭であるが、校友會側の資料によると、維持會が積極的に同志社へ移管を働きかけたことが窺われる（簿冊『校友會館設立二閱スル一件書類綴 大正一四―一五年』同志社社史資料センター所蔵）。
- (28) 『校友會館設立二閱スル一件書類綴 大正一四―一五年』所収
- (29) 小泉八雲記念館HP「沿革」(<https://www.hearn-museum-natsue.jp/about.html#history> 二〇二一年九月八日確認)
- (30) 「同志社創立六十周年（明治八年―昭和拾年）新島先生記念博物館建設趣意書案」同志社社史資料センター所蔵（新島遺品品庫収蔵資料上一六六九）
- (31) 現在は付屬屋と称して現存。一九八五年六月一日京都市指定有形文化財附指定。京都市指定有形文化財指定書付書参照（同志社社史資料センター所蔵）
- (32) 簿冊『新島遺品品庫關係資料綴 昭和十六―十七年』所収（同志社社史資料センター所蔵）
- (33) 「九月常務理事會記録」一九四〇年九月二六日、「新島先生遺品品庫建設經過報告」簿冊『新島先生五十周年記念展覽

会書類綴 昭和十五年」(同志社社史資料センター所蔵)

(34) 『同志社新報』第四五号、一九四〇年三月二〇日発行、一頁。

(35) 『同志社新報』第四六号、一九四〇年四月二〇日発行、四頁。

(36) 『同志社新報』第五九号、一九四一年六月二〇日発行、一頁、『同志社新報』第六二号、一九四一年一〇月二〇日発行、四頁、『同志社新報』第四六号、四頁、『同志社新報』第六六号、一九四二年二月二八日発行、五頁、『同志社新報』第七五号、一九四二年二月二〇日発行、六頁。

(37) 『同志社新報』第五九号、一頁、『新島先生遺品庫建設経過報告』『新島遺品庫関係資料綴 昭和十六―十七年』所収

(38) 『同志社新報』第五九号、一頁。

(39) 陳列目録「新島先生遺品庫開館記念展観」財団法人同志社、一九四二年一月二八日(同志社社史資料センター所蔵)

(40) 『同志社新報』第五九号、一頁。

(41) 「貴重なる遺品を深井英五氏寄贈」『同志社新報』第六二号、六頁、「新島先生遺品庫へ貴重な寄贈」『同志社新報』第七二号、一九四二年八月二〇日発行、五頁、「新島遺品庫へ続々寄贈品」『同志社新報』第七四号、一九四二年一月二〇日発行、四頁、「新島遺品庫に重要寄託」『同志社新報』第七五号、六頁。

(42) 河野仁昭、レジュメ「一私学の文書館——同志社社史資料室と新島先生遺品庫——」(『日本近代思想体系』第一七巻「月報」一〇号より転載して作成したレジュメ)(同志社社史資料センター所蔵)

(43) 拙稿、研究ノート「大学アーカイヴズに関する一考察——同志社社史資料センターを事例として——」『名古屋大学文学資料室紀要』第一五号、二〇〇七年三月、一三二頁。

(44) 同右、一三四頁。

- (45) 同右
- (46) 「洛中洛外」『京都新聞』夕刊、一九六四年六月一六日発行
- (47) これらの展示については、各展示会の際に配布された資料もしくは展示目録が同志社社史資料センターに現存。配布用冊子「文書で見る『同志社創学』展 同志社創立九七周年記念」、同志社社史資料編集所、一九七二年、配布資料「同志社創立九十八周年記念新島遺品庫公開」同志社社史資料編集所、一九七三年、配布資料「昭和四十九年度秋季新島遺品庫公開」同志社社史資料編集所、一九七四年、配布資料「昭和五十年年度夏季新島遺品庫公開」、同志社社史資料編集所、一九七五年
- (48) 河野前掲レジュメ
- (49) 鈴木重治「博物館のもつ教育力——同志社にふさわしい博物館の設置を——」『同志社時報』第九八号、学校法人同志社、一九九四年一月、四三頁。
- (50) 付表4校地略図のうち「1. 同志社今出川地域配置図」及び「31. 同志社田辺校地配置図」『事業報告一九八五年度』学校法人同志社、一九八六年五月
- (51) 宮下隆夫「——特集・田辺校地——田辺キャンパス開学にあたって——女子大学のことを中心に——」『同志社時報』第八〇号、学校法人同志社、一九八六年三月、六七—六九頁。
- (52) 拙稿前掲論文、一三八頁。
- (53) 法人直轄であった編集所は一九九四年に始まる法人事務組織の改正に伴い、一九九五年より大学人文科学研究所に属する組織となった。拙稿前掲論文、一三八頁。
- (54) 「人文科学研究所第八回運営委員会記録」一九九九年二月一八日（同志社社史資料センター所蔵）
- (55) 「人文科学研究所第六回運営委員会記録」一九九九年一月二五日（同志社社史資料センター所蔵）
- (56) 施設課「2. 新島遺品庫内の恒温・恒湿化改修」『同志社大学広報』第三二七号、同志社大学広報委員会、二〇〇〇

○年四月三〇日発行、三四頁。

(57) 岡本民夫「はじめに」『同志社大学歴史資料館館報』一九九六—一九九七年度（創刊号）、同志社大学歴史資料館、一九九八年八月、冒頭ページ

(58) 「同志社史資料室運営委員会規程」『同志社例規集』追録第一九号、学校法人同志社、一九九六年七月、二一八七頁。

(59) 少なくとも二〇〇二年頃から人文科学研究所と資料室の統合が委員会等で議論されていたが、二〇〇三年一月の段階で統合案は白紙となった。「第二回同志社史資料室運営委員会小委員会記録」二〇〇二年一月七日、及び「二〇〇三年度第一回同志社史資料室運営委員会小委員会記録」二〇〇三年一月二二日参照（同志社史資料センター所蔵）

(60) 拙稿前掲論文、一三九頁。

(61) 同右、一三九—一四〇頁。

(62) 筆者は二〇〇四年五月一日より同志社史資料センター社史資料調査員となり、展示活動に携わってきた。その時の経験として記す。

(63) 「同志社創立二三五周年記念事業」『同志社時報』第一二九号、学校法人同志社、二〇一〇年四月、一一二頁。

(64) 同志社史資料センター「ハリス理化学館同志社ギャラリー開館経緯について」『同志社時報』第一三七号、学校法人同志社、二〇一四年四月、七一頁。

(65) ハリス理化学館構想検討委員会「ハリス理化学館の構想について（答申）」二〇一〇年三月三一日付、一—三頁。  
（同志社史資料センター所蔵）

(66) 構想検討委員会は、ハリス理化学館を博物館にすることを目指したわけではなく、学外者や博物館を愛好する人だけでなく、同志社内諸学校の初年次教育や新入職員、留学生、その他同志社に関わり同志社を知りたい人をすべて対

- 象にして展示活動を展開するとともに、そうした人々が主体的に関わるような施設として構想したことから博物館ではなくギャラリーという表現になったという記憶がある。構想検討委員会委員を務めた者としてここに記録する。
- (67) 部長会資料「『ハリス理化学館新島記念ギャラリー』（仮称）設置検討委員会」の設置について「二〇一一年一〇月二七日付（同志社社史資料センター所蔵）」
- (68) 同志社社史資料センター「ハリス理化学館同志社ギャラリー開館経緯について」『同志社時報』第一三七号、七二頁。
- (69) ハリス理化学館新島記念ギャラリー（仮称）設置検討委員会、事務文書「ハリス理化学館新島記念ギャラリーの内容について（答申）」二〇二二年六月二日付（同志社社史資料センター所蔵）」
- (70) 事務文書「第四回ハリス理化学館新島記念ギャラリー（仮称）設置検討委員会記録」二〇二二年二月七日付（同志社社史資料センター所蔵）。なお、第一〇回ハリス理化学館新島記念ギャラリー（仮称）設置検討委員会において、委員長からの報告で学長への中間報告として「（仮）同志社記念館（Doshisha Memorial Gallery）」を名称として使用したことが報告されているが、最終的な答申では「ハリス理化学館新島記念ギャラリー（通称 同志社記念館・Doshisha Memorial Gallery）」となった。
- (71) 第一八回ハリス理化学館同志社記念ギャラリー設置準備作業部会、二〇一三年九月三〇日開催、資料五、「ハリス理化学館同志社ギャラリーの運営体制、利用形態等に関する申合せ（案）」二〇一三年八月二六日付
- (72) 事務文書「二〇一三年度第一五回部長会記録」二〇一三年七月二五日（同志社社史資料センター所蔵）」
- (73) 二〇一三年の開館時より現在まで、センターが事務局を務めるギャラリー業務のうち、館内の管理については、同志社エンタープライズに業務委託をしている。
- (74) 事務文書「第五回ハリス理化学館同志社記念ギャラリー設置準備委員会記録」二〇一三年四月二五日（同志社社史資料センター所蔵）。設置準備委員会の初期の段階では専従職員設置案も検討されたが、その後、廃案とされた。

- (75) 会議資料「二〇二〇年度第四回ハリス理化学館同志社ギャラリー運営委員会」(二〇二一年三月一九日開催)のうち委員会資料三「ハリス理化学館同志社ギャラリー企画展提案書(案)」(同志社社史資料センター所蔵)
- (76) 各展示室は無料で貸し出し、展示に係る費用は主催者の負担である。ただし、特別出陳としてギャラリーの展示活動の一環になることもあり、ポスター及びチラシの印刷費のみセンターが負担している。